

Title	都達夫の日本観
Author(s)	張, 淑琴
Editor(s)	
Citation	人間文化学研究集録. 1998, 7, p.73-83
Issue Date	1998-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10466/11676
Rights	

郁達夫の日本観

張 淑 琴

1. はじめに

中国人が留学のため近隣国・日本に渡ってきてから、百年の歳月を経た。中国人の日本留学の幕が開いたのは1896年であるが、不完全な統計だが、1911年にその数はなんと、2万5千人であった⁴⁾。日本に留学し、後中国で有名な文学者や政治家になった人々は、枚挙にいとまがない。郭沫若は「中国新文学の過半は、日本留学生出身者によって作られたものである」⁵⁾と語っている。中国の文学者・詩人である郁達夫は、これらの日本留学生出身者の中できわめて重要な人物である。郁達夫の研究者伊藤虎丸は、こう語っている。「同時期の留学生の中でも、彼が最も日本人の生活の内側に入り込んでそれを理解していた中国人の一人だった。」⁶⁾郁は若くして(17歳)日本に留学した。以来、日本とはたいへん関係が深く、1942年スマトラ島で日本の憲兵隊の通訳をやらされ、1945年の敗戦直後、日本の憲兵に暗殺された。筆者は、彼の不遇な生涯に目を留め、彼と日本との関係に興味を覚えた。

郁に関する研究は、日本では、郁の文学作品と日本文学との関連などについて、かなり進んでいる。中国側の研究者が、最も力を入れているのは、郁の伝記である。ところが、日本と深くかかわりがあった彼は、一体どういうふうに見つめていたのであろうか。多くの関連資料を調べた結果、日本でも中国でも、この領域に関する系統的な研究が、意外にも空白に近い状況であることがわかった。そこで、郁の日本観の内容と性格を考察することにより、近代における中国人の日本認識の一側面を明らかにしたいと思う。

2. 郁達夫の略歴と留学背景

郁達夫(1896年～1945年)は、中国の小説家・詩人である。浙江省の生まれ。名は文、あざなは達夫。1913年秋、17才で日本に留学し、翌年、東京第一高等学校に入学、名古屋第八高等学校を経て、1922年に東京帝国大学経済学部を卒業。帰国後、北京・武昌・中山の各大学の教授を歴任し、中国左翼作家連盟に加盟した。戦争中はシンガポールで『星洲日報』の編集に従事したが、終戦直後、スマトラで日本軍憲兵に殺害された。作品に『沈淪』『寒灰』『断残』などがある。

歴史上の人物を論ずるには、まずその人物が置かれた歴史的背景を考察しなければならない。そこで、郁達夫の日本観を考察する前に、彼の日本留学時の歴史的時代背景を見てみよう。郁達夫が直接に日本と関係した時期は二回ある。一回目は日本への留学時代(1913年～1922年)である。この間、中国は「内憂外患」に直面していた。第一次世界大戦が勃発、日本の帝国主義はその機に乗じて権益の拡大をはかり、中国への侵入もさらに積極的となった。山東半島を占領した上、さらに中国に「二十一か条」の不平等条約を提出したが、当時の総統袁世凱は、彼の帝政を回復する野心を実現するために、この不平等条約を無条件で受入れた。このように故国が日増しに衰弱の局面に臨んでいた歴史的背景の下で、郁達夫は日本に留学のためにやってきた。この客観的な歴史状況の下での留学について、

「することなすことすべて失望しないものはなく、憂悶しないものはない。」⁴⁾と感想を語ってい

る。この時期に彼は、異国の留学を体験しながら、多くの西洋文化にも触れることができた。留学期間中、西洋や日本の小説など千冊以上を読破したという⁶⁹。

郁が二回目に日本と関係したのは、1936年の末、日本を短期訪問した時期である。ここで見落とせないのは、日本を後にしてから十数年後に日中関係が悪化し、特に戦争が次第に拡大するとともに、彼の日本や日本民族についての認識が変化していったことである。以下、歴史背景に配慮しながら、彼の日本観の諸相を検討してみよう。

3. 郁達夫の日本観

(1) 日本文化

郁達夫は多くの作品を書いたが、日本文化そのものに対する評論はそれほど多くはない。1936年2月16日に「雪の夜」という文を書いた。その中に「自伝」の一章があり、これは郁の日本文化論といえる。

「日本文化は、独創性に欠けているが、その模倣は創造的な意味を持っている。礼教は中国に倣い…生産事業は欧米に学んでいるが、しかも固有の、あの生を軽んじ国を愛する、労苦に耐える辛抱強い国民性が中心の支柱になっている。根底は深くないが、枝葉はすこぶる繁茂している。発明・発見などの創始は絶無であるが、進歩は非常に速い。」⁷⁰

この論述を見ると、郁が日本民族や日本文化に対して、独創性の欠如を指摘するものの、全体としては、明らかに肯定と賛美の態度を持っているのがわかる。

日本文化の創造的な模倣という視点は、周作人の日本文化観に非常によく似ている⁷¹。実は、第一次世界大戦前に日本に留学した中国人の知識人達はさまざまな角度から日本観を述べている。殆どの筆者が日本の欠点よりも優れた点を挙げて礼賛している。例えば、明治26年来日した黄慶澄は、その「東遊日記」に、「日本では清潔を好み……」⁷²と書いている。1906年に日本に留学した中国文学者周作人は、日本人は「勤勉な民族である」⁷³と称讃している。日本人は愛国心が強く、勤勉でよく働く、また、礼儀正しく清潔である等々、郁も大勢の留学生と同じ視点で日本を見つめていた。しかも、郁が上記の文章を書いたのは、日本をあとにしてから十数年後のことである。当時の緊迫した中日関係下における、このような日本文化に対する肯定的な態度については、一定の評価を与えなければならない。

日本文化は創造的な模倣の特性を持っているという郁の日本文化論は、日本に渡った当時、彼の目に映った日本の状態と関係があると思う。これについて、彼自身こう語っている。

「私がそこに留学していた時は、明治の御代が既にその維新の事業を完成し、老樹の上に若い枝が接木され、古い革袋に新しい酒がもられ、その渾然たる圓熟ぶりにはほとんど破綻が見出されなかった。」⁷⁴

郁は、明治維新後の日本の巨大な変化を肯定的に受け止め、日本文化を賞賛している。精力旺盛な青年であった郁は、熱烈な愛と求知心を持って、日本に足を踏み入れた。郁は初めて目に映った日本についてこう詠嘆している。

「…私は、初めて日本の文化・日本の習俗に触れた。…日本芸術の淡白多趣、日本民族の刻苦忍耐は、この沿路の風景、あるいは海中の島々の果樹園や開墾地をみてもほほは察しがつく。」⁷⁵

これは、彼の日本に対する第一印象であるが、既に日本の風景ばかりでなく、その文化、日本人についても賛美している。当初の好ましい印象は、日本で何年も留學生活を送った後も、彼の心の中か

ら消えなかったのであろう。十数年を経て、「雪の夜」の冒頭に書いた日本文化論には、渡日した当初と同じ基調が貫かれている。

日本文化を論述するとき、これを自国の文化と比較することは、恐らくすべての文人達にとって避けられないことだろう。誰でも、固有の文化を持った上で異文化を見るからである。

十九世紀の初めごろ、「黒船と大砲」つまり軍事科学の力に頼り、ヨーロッパ資本主義のアジアへの侵入が始まった。日本を含むアジア諸国は、「西欧文明の衝撃」を強く受けた。彼は、「西欧文明の衝撃」を同様に蒙った中国と日本がその後にとった態度がまったく異なることについて、こう評価している。

「要するに、第一は「時機」の問題である。中国はより早く進化していたからこそ、遅れて落伍者になった。物質文明を提唱すべきなのに、ただ、幽霊のような精神文明を提唱した。第二は、「取捨」の問題である。西洋の物質文明は、東洋に同時に進入したが、日本はそのよい面を取ったが、中国はただ悪い面を取った。一つのクルミに譬えると、日本人はその肉を取ったが、中国人はその殻しか取らなかった。」⁽⁴²⁾

これは、西欧物質文明の輸入に対する、中国と日本との取り方の違いについて論じたものであるが、同時に彼が日本文化に肯定的な態度を持っていたこともわかる。

また、郁は日本の習俗や伝統文化にもしばしば触れている。日本での留学生生活を終えてから十数年後、1936年9月に彼は、「日本の文化生活」という題の文を書き、日本人の文化生活について、こう述べている。

「…彼らの娯楽、彼らの文化生活は、贅沢を好まない…淡泊の中からすぐれた趣を取り出し、簡易さの中に深い意味を盛り込む…」⁽⁴³⁾

さらに、日本の能楽や歌舞伎についてこう評価している。日本の舞踊の「単純さこそ、長所である」⁽⁴⁴⁾ そのほか、日本習俗の中の「茶道」は「面白くて優雅な礼儀作法」で、「生け花」は「一種の流派ある妙技」⁽⁴⁵⁾ だと言っている。このように、郁は日本の伝統文化に対して、終始肯定的な態度を持っていた。

郁達夫の日記を取めた『郁達夫全集』中の「塩原十日記」（1921年8月10日～18日）に、郁が日本語で書いた旅行体験が収録されており、その中に日本の盆踊りの場面がある。

「踊り乍ら男女は又た歌ふ。その歌の原始的なる事、尾音悠揚にして哀調を帯びて居る事に、予は思はず涙を誘はれた。…予は堪まらなく盆踊りが好きになった。その原始的な音頭が気に入った。無邪気な此の若き男女の、何事をも打忘れた様子が気に入った。悲涼激越な鄙歌の歌音も気に入った。特にかうした夜の薄黒い森の神秘的な頹廢的な気分が気に入った。」⁽⁴⁶⁾

この記事は、郁が日本に留学中、ある夏（1921年）の猛暑に耐えず、避暑のため、山の奥へ旅に出た時に見た光景である。日本の伝統的な習俗・文化である盆踊りに彼の独特の認識が示されている。異域他郷に「漂泊」していた彼のその寂しい心は、まさに盆踊りの音頭や歌音に表されているのだ。ここで彼は、日本の伝統的な習俗への独自の認識を表現しただけでなく、彼の当時の心境をも表現したものである。思われる。「盆踊りが好き」、「その原始的な音頭が気に入った」というような言葉は、特定の環境に置かれた彼の当時の気持ちを表したのである。しかし筆者は、この日記から、郁の性格の一面が伺えると思う。つまり、物事に対して評価するとき、常に自分の感情に左右され、特定のものに興味を起し、評価を与えるということである。これも、彼の日本観を考察するにあたり、無視してはならない一面であろう。また、「原始的」、「無邪気」、「鄙歌」や「頹廢的」などの表現にも注目し

なければならない。これらの言葉は決して褒めるような表現ではないが、なぜ、郁は、「思わず涙を誘はれた。」ほど感激させられた盆踊りに「鄙歌」や「頹廢的」などの野蛮・未開或いは後進的な評価を与えたのであろうか。おそらく自国文化と比べた上で、このような優劣比較の表現法を使ったのではなかろうか。

(2) 日本社会

日本留学を背景として書かれた『沈淪』などの自伝小説により、郁達夫は名を中外の文壇に馳せた。一方、その作品に表れた「退廢的」、「色情」的な情緒に対しては、中国文壇から厳しい非難が浴びせられた。郁の研究者・許子東は、この作品の中に表れた「退廢的」、「色情」などの情緒的傾向の根源として、現実社会に対する不満と、郁個人の気質上に原因があるほか、「世紀末思潮の影響を受けた」⁽¹⁹⁾と指摘している。しかし、留学当時の日本社会を、郁はどう見つめていたのであろうか。

「当時の日本は、政治面は安定してきたが、思想面では、あらゆる分野で混乱していた。誰も、古い伝統を破壊しようと思っているが、安心立命させるような新事物が見あたらない。だから、普通の神経過敏な心ある青年は、ニヒリズムに陥り、華嚴滝に身を投じ、自殺しようとする。意志が弱い者は、デカダンの不良になり、目前の官能の満足を食べる…」⁽¹⁸⁾

ここで、郁は古きを捨てて新しきを打ち立てようという、変革時代における当時の日本人の精神面を語っている。彼は、「神経が敏感」、「退廢」、「空虚」及び「官能への満足」などの表現で当時の日本青年像を描いているが、「頹廢と感傷」が、郁の文学の特徴であることはよく指摘された⁽¹⁹⁾。ここで、彼の文学作品の風格などについて論じるつもりはないが、日本での留学体験が彼の生涯にわたって、大きな影響を与えたことは否定できない。伊藤虎丸は、郁と近代日本との接触について、こう論じている。

「…彼ら（ここでは郁達夫、田漢、鄭伯奇などの「創造者」の同人をさす 一筆者注）、いわゆるロマン主義と呼ばれるものには、現実の背景があったと共に、日露戦後の日本資本主義の急速な発展を背景にした、いわゆる「都会文化」と、文学的には、スバルや三田文学などを代表とする新ロマン派、頹廢派などの強い影響があったことは否めない …」⁽²⁰⁾

伊藤は、近代日本の世紀末文学思潮が郁に与えた影響を論じたのであるが、この視点は、郁の研究者に公認されている。

さらに、郁達夫は「雪の夜」の文の中で、当時の東京について次の如く回顧している。

「両性解放の新時代が早くも東京の上流社会—ことに、知識階級と学生大衆—のうちに到来していた。当時の名優衣川孔雀・森川（森の誤りか）律子らの妖艶な写真、化粧前の半裸の写真、…すべて青年の心理を挑発するに足る一切の対象と事件が、この世紀末の過渡時代の中に、特に多く、特に雑然と入り込んできていた。」⁽²¹⁾

郁は、当時の日本における思想や文学思潮及び性解放などの諸現象に関心を寄せていた。しかし、これらの現象は、当時の日本社会の全体像を代表するものではない。当時の日本は、いわゆる「大正デモクラシー運動」が全盛期を迎えつつあった時期であるが、経済面においては、第一次大戦の戦争物資の供給などにより、繁栄を誇っていた時期でもある。当時の日本の経済状況に関して、郁はあまり触れていない。ただ、後になって、「日本の文化生活」（1936年刊）という文の中で、当時の日本社会について、こう回顧している。

「明治維新後、七、八十年も経っていないが、国家の発展ぶりは、千年あまりの文化を有する英、

仏、独、伊などに匹敵する。」⁽²²⁾

「…忍耐強い生活、秀麗な山川、満ち足りた精神、整然たる秩序、今思い出すとそこでの暮らしは、蓬莱島での仙境の生活だ…」⁽²³⁾

この記事により、彼が明治後の日本国に好感を持っていたことは明らかである。しかし当時の日本社会を回顧するとき、一方で、日本青年達の「ニヒリズム」や「アカダシ」を指摘しながら、同じ日本社会に対して、他方で「満ち足りた精神」、「整然たる秩序」と一括している。この矛盾した表現から、彼の人間性がわかると同時に、彼の日本に対する複雑な感情も伺える。

日本社会に対する矛盾した認識は、彼の日本文人との交遊からも伺える。彼は、日本の文人は社会の中・上流階層だと思込んでいたらしく、「雪の夜」の中には「東京の上流社会—ことに、知識階級」とか、「知識を持った中・上流の日本国民」⁽²⁴⁾といった表現があり、日本文士は「日本の優秀分子である」⁽²⁵⁾という考えを示したこともあった。彼は、まさにこの観点から、日本文人と往来し、その交流を通じて、日本社会を観察していた。

当時の中国日本文人の中で、彼ほど多くの日本人の友人を持った者はいないであろう。名古屋の第八高校に留学していた時から、すでに有名な漢詩家・服部担風と親交を始めていた⁽²⁶⁾。しかし、郁の交友関係で最も重要なのは、佐藤春夫との関係であろう。郁の小説最初の収穫とされる『沈淪』(1921年)は、当時の新進作家だった佐藤春夫の出世作『田園の憂鬱』(1918年)の影響下で書かれた作品であり、また、二人の関係の決裂は、両国文学の間が決裂するきっかけだったとも言われる⁽²⁷⁾。さらに、郁の1917年から1936年までの日記を通して、志賀直哉、金子光晴、国木田独歩及び日本の新聞社記者等々の各階層の人々と往来があり、親交のあったことが明らかになった。郁は彼らをどう評価したのだろうか。

「我々は日本で暮らした日が少々長かったので、平時に交際のあった日本の文士も比較的多かったと言えそうだ。…ともかく文士というものは日本の優秀分子であり、文士の気節、判断力、正義感といったものは一般人の人より強いものと思っていた。…ひとたび対日抗戦の関頭に立つと、これらの文士の醜態はたちまち暴露されてしまった。我々は、彼らに騙されていたという後悔を抱くのだが、…」⁽²⁸⁾

この論述から、彼の日本文人に対する認識が伺える。つまり、彼は、日本文士は「日本の優秀分子である」と思いこみ、彼らに大いに期待していたのだ。故にかつて、自分が最も尊敬する作家であり、親交のあった佐藤春夫が『アジアの子』という小説—それは、郁をモデルにした主人公「鄭」が、間諜でありながら親友の妻を奪い、自分の妾としたという内容のものである。この小説を発表したことは、郁に大きな衝撃を与えた。彼は、佐藤の根も葉もない話に非常に怒り、直ちに「日本の娼婦と文士」という文章を書いて、これに仕返しをする。しかし彼は、上記の文に続けてこうも語っている。

「むろん、日本の文士も一概に論ずることはできない。…我々は決して佐藤の如く、黒白を分けず一律の漫罵を加えることを願わない。秋田雨雀、志賀直哉、島崎藤村等の人のように、いまだになお良心を曇らせていない老作家がいる。…文人の気節を持つ作家には、全腔の熱血をもって、敬意を捧げなければならない。」⁽²⁹⁾

ここで郁は、日本文人を、良心を曇らせていた作家と「曇らせていない作家」、というふうに、単純に二つのタイプにわけている。このように、一部の文士を厳しく批判しながら、一部の文士に高度な賛美の辞を捧げるという極端な両面こそ、郁の性格そのものの反映だと、筆者は思う。つまり彼は、

性格的に「人間主義」なのである。要するに、或る人間の言動、思想信条、態度に対して、その言動や思想などに即して評価を与えるのではなく、その個人そのものに対して評価を与えるのである。その結果、言動や思想についての問題点が個人の全人格に集約されてしまい、人格批判だけが、表面に出してしまうのである。

日本文人との交遊について彼は、1940年に新居格（当時日本近代生活社の記者・評論家）への公開返答書の中で、次のように回顧している。

「私には、日本人の友人が、実は大勢いるのだ。私が4年前に日本に行った時に、受けた諸君のおもてなしは、いまでもありありと浮かんでくる。とくに、京都に到着した時、電車を降りると、直ちに奈良へ赴いて、志賀直哉を訪問した…」⁽⁶⁰⁾

日本文人との交遊が、郁の日本観の形成に大きな影響を与えたことは確かである。彼は、常に日本文人は日本社会の代表という信念を抱きながら、日本人や日本社会を見つめていた。これは、彼の日本観の一つの特徴である。しかし、「人間主義」者である彼は、自分の好悪の感情を尺度として、日本人の中の一部分にすぎない日本文人にこだわり続けた。郁は「彼らに騙されていた」と後悔しているが、郁の眼には、郁を「騙した」日本社会の全体像は見えていなかったであろう。ただし、「人間主義」的であったが故に、中日戦争が益々悪化の局面を迎えた「非常時」とも言える時に、一部の文人達に、憎悪の念を持たなかったことについては、一定の評価を与えなければならないであろう。

(3) 日本民族

1912年は中国の歴史の中で、最も激動の年であったと言えるだろう。清朝最後の皇帝宣統帝は退位した。孫文は臨時大総統に就任、中華民国が誕生し、民族革命が一段落を告げた。翌年の秋、多くの文人志士と同じように、「外面へ出口を捜す」⁽⁶¹⁾ために、郁達夫は日本への留学の道を歩みはじめた。1922年に東京帝国大学経済学部を卒業するまで、八年あまりの留学生生活を彼はどう評価していたのであろうか。

「私の抒情時代に、あの荒淫残酷な軍国専権の島国で過ごした。眼には故国の沈衰を見、身には異郷の屈辱を受け、感ずること思うこと、することなすことすべて失望しないものはなく、憂悶しないものはない…」⁽⁶²⁾

これは、郁が1932年12月に書いた「懺余独白」の中の一節である。一体どうして、彼はこの極めて悲憤に満ちた怒りを抱くようになったのであろうか。

郁達夫の日本観を論ずるには、何よりも日本留学を背景とした第一作「沈淪」を見逃すことができない。「沈淪」は、彼が1915年から1919年まで、名古屋第八高校に留学体験したことをもとに書かれたものと思われる。当時の中国はまさに深い災難に直面していた。袁世凱は、国を滅ぼす各項の条約を承認し、全国民衆の反対を無視して、1915年12月に中華帝国皇帝の座に上がろうとし、中国各地で大規模な、また強力な帝政復活糾弾の運動が相ついで起こった。この時期、日中関係は次第に悪化した。国事や民事を気にかける郁は、想像できるかぎりのさまざまな体験をした。これらの体験は積みかさなり、彼の民族的な怒りは日々に広がっていた。「沈淪」の中でこう書いている。

「彼らはみんな日本人であり、みんな私の敵だ。きっといつか復讐の日が来る、私は彼らに仕返しをする」⁽⁶³⁾。

「なるほど、日本人はもともと中国人を軽視する。我々が犬を軽視するのと同じである。日本人はみな中国人を“支那人”と呼ぶ。この“支那人”の三文字は、日本では、“げすなやつ”とい

う人を罵る言葉より酷いものである。」⁽⁶⁴⁾

これらの言葉は、彼の民族的な怒りの表われの頂点を示すものであろう。そして、ここには怒りの心境を述べる一方、日本民族への反撥の意が伺える。

郁は異文化を体験し、常に異国で支那人としての屈辱を受け、その苦しみを味わった。彼の日本観を考える時、その歴史的背景や複雑な環境を考慮すべきであるが、『沈淪』を見るかぎり、郁達夫には、日本民族への反撥、つまり強い反日感がある。

さらに、もっと明確にこの心境を表している作品がある。それは、「雪の夜」の中で日本の国情について、次のように記しているところだ。

「知識を持った中流・上流の日本国民は、中国の留学生に対して、もともと、懸命になってまるめこんでいるのだが、しかし彼らの笑いの中には刃が隠されている」⁽⁶⁵⁾

この憎しみを込めた言葉の中から、郁が様々な体験を経験してきたことを伺うことができるだろう。

彼は、1917年3月15日の日記の中で、こう書いている。

「…午前、藤塚先生の中国語授業を聞いて、中国人を罵ることばに絶えられなかった。これほどの軽はずみを止めさせるため、校長に文書で抗議しようと思ったが、逆に屈辱を受けさせられることを恐れ、…」⁽⁶⁶⁾

これは、名古屋第八高校での出来事だった。この体験が彼に大きな衝撃を与えたことは間違いない。18年後の1935年4月29日に郁は「偉大的沈黙」というタイトルの文も書いている⁽⁶⁷⁾。また、彼は1917年5月31日の日付の日記にこう書いている。

「…午前、我が国の弱いことを日本人に嘲弄された…」⁽⁶⁸⁾

生活上の些いな出来事を記録したこれらの日記から、弱国から来た郁が、異国日本で受けた屈辱感を感じることができると思う。名古屋での生活体験は、彼の反日感情を一段と高めさせ、彼の日本観の一面の基盤を形成したと思われる。

ところで、我々は彼の日本民族観のもう一つの重要な一面を見落としてはならない。それは、日本民族への賛美と愛である。『沈淪』などに表れた日本民族への怒りは、あくまでも当時の日本人の中国人蔑視を憤り、また、祖国の劣弱から劣等感に悩んだ結果であって、感情的なものである。彼の生涯と諸作品を通してみると、彼は心の底から日本人民を愛していることがわかる。この点について、小田獄夫はこう述べている。

「大正日本の文化の爛熟した空気、平和の気分、肌理のこまかい自然、女性の優しさ等々に、彼は拭い去れない魅力を感じていたのではなかろうか。」⁽⁶⁹⁾

彼は、日本人に「贅沢を好まない」、「忍耐強い生活」等の評価を与えている。また、留学を通して、多くの日本友人と親交したことも事実であり、自らの留学体験を背景として書かれた『南遷』の中には、主人公が日本の少女と海岸で散歩する場面があり、その真摯な友情と美しい境地が描かれている。彼の日本留学生活は、決して暗い思い出ばかりではなかった。留学時代の美しい思い出と、日本民族への怒りとは、彼がもともと有していた二面性の反映であると同時に、日本人の中国人に対する軽蔑により生じた怒りと、終始一貫した日本民族に対する賛美も、彼がもともと有していた、矛盾した日本民族観そのものであるといえよう。

(4) 日本の戦争

前述したように、郁の日本観の内容を考察するとき、彼の置かれた時代背景を考慮しなければなら

ない。近代における日中関係の悪化と日中戦争の勃発といった時代背景は、彼の日本観形成に大きな影響を与えた。日本と深くかかわりを持ち、日本や日本人に対して、複雑な思いと感情を持っている彼の戦争観はどのようなものであったか。

彼の日本への怒りは、時代の流れとともに、新たな段階に入ることとなる。すなわち、日中戦争の全面的な開始により、彼の日本民族への怒りは日本軍閥への怒りに変わるのである。彼は文学作品を書くことを断念し、専ら抗日文を綴りはじめる。

「日本軍閥は、強盗より更に凶暴で悪い。獣も及ばない。強盗や獣は、殺人と放火をしないし、女性を強姦しないからだ。」⁽⁴⁰⁾

この文から、郁の日本軍閥に対する骨身にしみるほどの憎しみと、彼の日中戦争に対する認識がうかがえる。

彼は、常に戦争の被害者の立場に立って、日本軍閥を批判していたが、日本の一般の民衆に対しては、同じく被害者の立場に立って、戦争に反対するものと認識していた。彼は、「戦争と平和」の一文の中で、「日本の民衆は、元々戦いたくないし、大多数の兵士も戦いたくない。」⁽⁴¹⁾また、「日本放送の宣伝要点」の一文の冒頭に、

「中国の民衆は、本来平和をすこぶる愛し、日本の民衆も同じだと思う。…日本の、中国への侵略戦争は、まったく少数軍閥と財閥によるものだ。」⁽⁴²⁾

と書いた。また、同じ文章の最後の一節には、

「我々が要求するのは、人類の愛、国際的な平和…、反対するのは、侵略戦争、軍閥の野心…日本の民衆よ！もし、我々と同じ要求があれば、同様な憎悪感を持てば、私たちと一緒に連合し…日本軍閥らの暴行を止めさせ…」⁽⁴³⁾

戦争が、郁を含む中国人の一人一人に大きな衝撃を与えたことはいまでもない。この呼びかけの文章から、この戦争を起こした日本軍閥に対する郁の憎悪の感情を知ることができる。一方で、彼は日本の民衆を信じ、彼らとの連帯を期待していたことがわかる。日本と関係が深い郁は、中日両国開戦の場面を見たくなかったはずである。郁は1936年11月に日本を訪問した。一ヶ月あまりの滞在中、彼は日本の政界、財界及び文化界などの各方面の人々と接触し、各地で遊説した。しかも、日本の新聞や雑誌などに文章を発表した。様々な努力をして、民間の感情や政治家の理知によって両国の交戦を阻止させるように望んだのである。人間の感情に訴え、感情を同じくすれば連帯できるはずだというのは、正しく「人間主義」者郁らしい考えであるが、筆者は、このような考えと行動は、彼が長く日本に住んだことと深く関わりがあり、心の底に消えない日本民族への愛と関係があると思う。彼は、日本民族への愛を持ちながら、戦争を起こした日本軍閥を骨髓に徹するほど憎んでいたのだ。

彼の日本軍閥への憎しみは、文で表されただけでなく、やがてその行動で表されることになる。彼は1936年2月18日の日記の中にこう書いている。

「…松永氏と一緒に日本料理店常磐で食事をした。酒を飲み過ぎたせいか、日本人の侵略行為を強く非難した。」⁽⁴⁴⁾

1938年年末、『星洲日報』社に招かれ、彼はシンガポールへ赴いた。翌年に『星洲日報』の主編となり、商売人を偽装し、当地に定住した。流暢な日本語を話すため、日本の憲兵隊の通訳をさせられた。抗日文を書きながら、軍隊の通訳をさせられた彼は、苦しい境地に追い込まれる。郁雲が書いた『郁達夫伝』⁽⁴⁵⁾によると、彼は、憲兵隊の通訳の機会を利用し、密かに多くの華僑や当地の住民を助けたという。やがて、通訳を通して、内部の多くの秘密を知るようになった郁は、終戦直後、日本軍隊

に殺された。日本の兵士の残虐な暴行に憤慨した郁が、兵士を家まで呼び、密かにアルコールの強い酒を飲ませ、麻酔死させたというエピソードもある。

「私には奴等を突き殺すことはできない。だが、奴等を徐々に麻酔死させることができる」⁽⁴⁶⁾
だから日本人に売る酒だけはアルコールの度数を極端に高めることにしたという。

郁は、特定個人への「復讐」という方法で、この戦争を起こした日本軍閥や軍隊に対する憎悪を表したのである。この「復讐」は、『沈淪』の中に出てきた日本人への「仕返し」に他ならない。郁の日本民族への怒りは、戦争を境に日本軍閥への怒りへと変わっていた。また、シンガポールでの一連の活動において、郁は、すでに文人から戦士になっていた。しかし、郁の「人間主義」的な民族観・戦争観は、その間変わることはなかったのである。

4. おわりに

郁達夫は、多感な青年時代を数年間にわたり、日本の土地で過ごした。豊かな感受性を持つ郁は日本に対し、愛と憎しみの混じった複雑な感情を持った。本研究を終えて、筆者は、軍国日本を憎しみながら、日本人に対して、なお好意ある理解を捨てきれず、あげくに日本軍の憲兵に謀殺され、溢れる才能を持ちながら、その短い生涯を閉じた郁の不遇な運命に改めて感銘を受けた。本論文では、歴史背景に配慮しながら、郁達夫の日本観の諸相を検討した。彼は、日本文化に対して、独創性の欠如を指摘したが、日本の伝統的な習俗・文化である舞踊、「茶道」、「生け花」及び盆踊りなどに一定な評価を与えた。彼はまた、思想、政治、及び日本社会の一階層—日本人との交遊などの多方面から日本社会を論じた。特に、一部の文士を厳しく批判しながら、一部の文士に高度な賛美の辞を捧げるという両面から、彼は性格的に「人間主義」であることがわかった。しかし、中日戦争が益々悪化の局面を迎えた時に、一部の文人達に、憎悪の念を持たなかったことについては、一定の評価を与えなければならないであろう。さらに、『沈淪』などに表れた日本人の中国人に対する軽蔑により生じた怒りと、終始一貫した日本民族への賛美から、彼の矛盾した日本民族観も伺える。彼は、戦争を起こした日本軍閥を骨髄に徹するほど憎んでいた。一方、日本の民衆を信じ、彼らとの連帯を期待していた。日本軍閥に対する憎悪の感情と、その反面での日本人と日本の国土への心からの愛とは、そのまま彼の自己矛盾に満ちた性格とその行動につながっている。「人間主義」者である彼にとって、愛と憎しみとの同居は、たぶん矛盾するものではなかったのであろう。この研究を通して、近代における中国人の日本観を解明する一助となれば幸いである。

注

- (1) 『留学生新聞』(アジア・パシフィック・コミュニケーションズ発行 1997年9月 第148号の記事による。Douglas R, Reynolds 著『新政革命与日本』1993年P.45.)
- (2) 『郭沫若文集⑩』(人民文学出版社 1954年) P.333.
- (3) 伊藤虎丸、祖父江昭二ら編集、『近代における中国と日本』(汲古書院、1986年) P.208.
- (4) 同上。P.211.
- (5) 『郁達夫全集⑫』(浙江文芸出版社 1992年) P.498.
- (6) 王自立、陳子善主編、『郁達夫研究資料 上』(天津人民出版社、1983年) P.57.
- (7) 『周作人全集③』(藍灯文化事業股份有限公司 1982年) P.666.

- (8) 尾藤正英『中国文化叢書 —— 日本文化と中国』（大修館書店 1968年）P.329.
- (9) 『周作人全集③』P.754.
- (10) 王自立、陳子善、前掲書P.57.
- (11) 同上。PP.54-55.
- (12) 『郁達夫文集⑧』（花城出版社 1984年）PP.69-70.
- (13) 『郁達夫文集④』P.157.
- (14) 同上。P.158.
- (15) 同上。PP.159-160
- (16) 『郁達夫全集⑫ 日記』（浙江文芸出版社 1992年）P.25.
- (17) 許子東『郁達夫新論』（浙江文芸出版社 1984年）P.229.
- (18) 前掲書、『郁達夫全集⑤』 PP.411-412.
- (19) 許子東、前掲書、P.229.
- (20) 伊藤虎丸ら編、前掲書、P.233.
- (21) 同上。P.233.
- (22) 前掲書、『郁達夫文集④』P.157.
- (23) 同上。P.156.
- (24) 王自立、陳子善、『郁達夫研究資料 上』（天津人民出版社 1983年）PP.57-59.
- (25) 前掲書、『郁達夫全集⑥』P.317.
- (26) 稲葉昭二、『郁達夫—その青春と詩』（東方書店、1982年）の中に「郁達夫と服部担風」と題する一章があり、郁と服部担風との親交について詳細に論じている。
- (27) 伊藤虎丸ら編、前掲書、P.39.
- (28) 前掲書、『郁達夫全集⑥』 P.317.
- (29) 同上。P.319.
- (30) 王自立、陳子善 前掲書 P.297.
- (31) 同上。P.52.
- (32) 伊藤虎丸、前掲書、 P.211.
- (33) 郁達夫『沈淪・迷羊』（人民文学出版社 1988年）P.7.
- (34) 同上。 P.37.
- (35) 王自立、前掲書 『郁達夫研究資料 上』PP.57-58.
- (36) 前掲書『郁達夫全集⑫ 日記』 P.3.
- (37) これは郁達夫の名古屋第八高校留学中の体験である。ある先生の中国を侮辱する発言を聞いて、彼は抗議するため、その後、先生の授業に出る時、自分が読む番になっても、ただ硬直して立っただけ、再び口を開いていなかった。当時の日本人の学生は、このため、彼に「偉大な沈黙」というあだ名をつけたという。前掲書、『郁達夫全集⑥』P.186.
- (38) 前掲書、『郁達夫全集⑫ 日記』PP.3-4.
- (39) 小田嶽夫、『郁達夫傳』（中央公論社 1978年）P.58.
- (40) 前掲書『郁達夫文集⑧』 P.290.
- (41) 同上。P.221.
- (42) 同上。P.281.

(43) 同上。P.282.

(44) 『郁達夫全集⑫ 日記』 P.450.

(45) 郁雲『郁達夫伝』（福建人民出版社 1984年）P.184.

(46) 岡崎俊夫「中国の作家と日本」（『文学』21-9 1953年）P.892.